

「創設五周年に寄せ思いつくままに」

ケアハウス熱海伊豆海の郷 お客様 高橋 和枝

風光明媚で温暖なこの地に立派な施設を建設されて以来、今日までのご苦労や、困難の一つひとつを思い出され、関係者の皆様も感慨ひとしおの事と推察いたします。



近年各地に老人介護施設が建設され、又、町なかを行き来している介護事業所の車を見るにつけ、大いに喜ばしい事と思いますが、内容の伴わない老人の悲惨な出来事や、思わしくない風評などを耳にする時、この伊豆海の郷の素晴らしさを改めて感じます。

私は入居第一日目の食堂に行った時、皆様のお顔がとても穏やかで、安らいだ、いいお顔をしてくれました。「あーあー、ここでは職員方々に優しく見守られ、皆さん安心して毎日を送っていらっしゃるんだな」と感じました。間もなくしてS高等学校の事務長様が私を訪ねてました。それは私が老人ホームに入ったので、校長先生が私を心配してどんな所か見て来る様にとの事で……。私は暫らく主人の話など。テラスに出ました。青く澄んだ相模湾に浮ぶ島々、遠く伊東まで突き出た岬、小さな釣船、白い波、私は「夜は百万ドルの夜景ですよ。初島の燈台が緑・赤と点滅する頃になると熱海の渚から、ずっと連なる伊東、川奈の渚までの色とりどりのネオン、光の競演です。」等々自慢を一杯しました。事務長様はお帰りになられる時、「安心しました。奥様は毎日マリア様の懐に抱まれているようですね。」(先生は敬虔なカトリック信者)私はとても嬉しかった。正にこれ以上の賛美があろうか。そして安らげる言葉があるだろうか。

食事が済むと車椅子を左手で押し、右手でもう一人の車椅子を運んでニコヤカに、長廊下を小走りに行く若い介護のお姉さん達、食事の済んだお盆を両手にヒョイと乗せて後片付け、あのパワー。若いから？「馴れですよ。」とニコリしている。身体の調子の悪い時など、すぐに全員に連絡が行き渡り声を掛けてくれる。夜廊下の明りが薄暗くなると、「和枝さん、大丈夫ですか？」どれほどこの一言に安心してベットに付くことができるでしょう。

入居当時、私達のちょっとしたいざこざをニコリされながら大岡裁きよろしく、さり気なく解決して下さった遠藤施設長様。「まだまだ勉強する事が沢山あります。いかにして皆さん方が快適な日々を過ごされるか、又喜んで下さるか。」この謙虚な徳田施設長様。お顔に似合わない高笑い。そして、静かに私達が納得する様お話ししてくれる鈴木主任さん。

さらに、私の帰ってくる靴音が解るのかしら？大きなモップを持ち机の下に潜りながら「おはようございます！」明るい矢後さん。体重を気にする私にグラフを作って「私とどちらが細くなるか競争しましょう。」とグラフを作ってくれた松久看護師さん。「和

枝さん歩く時右足をあまり広げないで。」と後ろから見てくれる平元さん。外れた入歯を一生懸命上手に入れてあげる吉井さん。介護の若いお兄さん、お姉さん達、廊下を何時も小走りに行く。大変なお仕事だなあ「ここのスタッフは、皆さん良く教育されているのね。」芙美子さんとよく話し合っています。

或る日の夕方、「ねえ、今日の夕焼けの空すごく綺麗だったわね。本当に始めてこんな景色を見たわ。」「エッ！」芙美子さん、禮子さんそして私の三人は、まるで申し合わせた様にこの夕空を見ていたのです。茜色に染まった空が刻々とグラデーションのように広がり、それが水面に映り薄桃色に輝いている。その海面を真白く長い航跡を残して連絡船が帰って行く。薄墨色の山々の稜線が影絵の様に浮かんでいる。この美しい自然の織り成す不思議。また、月の出も素晴らしい。オレンジ色の滴る様な月が漆黒の大空へ静かに昇って来る。そのお月様に呼応する様に宵の明星が大きく瞬く。私は思わず「神様有難う！」と、そして天国の主人を想い浮べ涙ぐんでいました。



平穏な日々の中、あの三月十一日の東日本大震災・津波、そして原子力発電所の事故、毎日テレビに映し出される爪跡に涙がこぼれ凝視出来ない。この地球上に、この大和の国に、これほどまでの悲惨な痛ましい事が起きるなんて考えられない。誰が想像し得たであろうか。私は「陸奥を魔もの襲いて春震撼」と一句詠んで記憶にとどめて置こうと。救援物資を待つ人々。瓦礫の山々。海面に横たわる家々。漁船。一本のバナナを三人で分けての一日の食事。飲み水も無い。とに角あの惨状はどう表現し、理解したら良いのか解らない。涙が止らなかった。

こんな折、何の支障も無く三度のお食事が目の前に出され、戴ける有難さ。時々「今日のおかず！これ何？」なんて不平を洩らすことしばしばだった。この時ほど、何の心配も無く戴ける、これほど有難い事は無い。不平など言ったら罰が当たる。全く単純な考え、当たり前前のご飯がこれほど大きく、深く私の胸にささった事はない。私だけでは無

い誰もがそう思ったに違いありません。原子力の事故は人災だ。許せない。絶対に。隣席の高雄お父さん（私はいつもお父さんと呼ばせて頂いている。）と「神への冒瀆であり、畏敬を忘れた、科学者の驕りですよ。」「私達は老い先短い、これからの若者や子供達はどうなるでしょうね。」と憂い話し合いました。そして、ここに入居出来たことの喜びを一杯に感じ感謝しました。

日本中が悲鳴、悲嘆、悲憤の中、復興対策の後手後手な政府に腹立たしく、何も出来ない自分をどれほどもどかしく思った事でしょう。痛ましい惨状の日々が過ぎて行く。そんな中、あの W 杯優勝の撫子ジャパンの朗報、快挙に日本中が、いや世界中が沸いた。私はテレビの画面に向かって「有難とう！」を何度も言い、拍手を一杯贈りました。

今後、益々、老人ホームなど色々な施設が造られるでしょう。ここに入居されている皆様方、お一人おひとりそれぞれ長い人生をご苦労なされ、一生懸命生きてらしたと思います。施設の皆さんは、このお一人ひとりの生きられた人生を大切に尊重され、入居者の皆様が納得され、心から伊豆海の郷での毎日を満足され、長生きして良かった。そして、職員の方々に笑顔で「有難とう！」が言ってもらえる様、真心を持って（欲張りかな）慈しみ努力して頂きたいです。判断力も鈍り、記憶力も薄れて老いてゆく日々、眼の前の美しい景色（毎日のご馳走です。）を眺めながら、ここが私達の終の栖、そして安らかな日々を送りたいと思っています。

どうぞ施設長様、若い職員の皆さん、私達と一体となり（無理ですね老人は）何処よりも素晴らしい、日本一の伊豆海の郷となりますことを確信し、輝かしい五周年のお祝をもう一度、心から「オメデトウ！」を申しあげます。

最後にあれこれと楽しい催し物の企画、準備など大変と存じますが、これからも楽しませて下さいませ・・・。

